

紙江入楚

紅梅

43



紅梅

梅家大納言宮家母子達也

本宮系系為女子二人

藤原及女御中君母儀也苗腹枝柱君之男子一人相具矣  
於此之時女子一人有之自宮之心急給一人也

唯君番東宮給也 案十七八 藤原殿女御之

中君与宮姫君一巡遊慈給也

此書之蓋之源中納言之口之誤り之源中將と申す之蓋

小夕方之長長紅梅之長梅家大納言任大長長也此秋道也

中納言時更也之れは夕方と君大長と去紅梅乃可く之ハ

梅家大納言と之れは是ハ昇平を以て是之れといふ之源中

納言と申す是之れは是ハ同平を以て是之れといふ之源

中納言と申す是之れは是ハ同平を以て是之れといふ之源

紅梅年立ハ必し是之れを以て是之れといふ之源

書載之れは是之れを以て是之れといふ之源

梅家大納言折梅花以御子君公為御歌各部之文也

之ハ以て念懸文非君不兼川中君更給也







莫公  
知美ヨリ  
廿七  
今午年  
河海  
八子  
左角

義公此卷兼金言之能分時年記以新礼一向小也

一竹河紅梅之可立次才云事  
一紅梅竹河一二可立云事  
右面説く事有竹河乃始中分終 首に位は

宰相 中何云

此卷凡神より意源中何云と然ハ竹河の次より入る事  
竹河の終より梅意大綱云任右左長梅意何と紅梅ハ一  
不給は由事小年紀乃新礼入るは是ハ紅梅大長  
此並次才前後は夏

法華 囑累 勸及致 西不終才未相遠 流海あり  
卷乃御人の囑累 流海あり

此の河梅意大綱云ときこゆわな取波仕れがくは二帝  
なりと云流ひり 大志の誓いなり 信あり

秘 此の時河梅意大綱云とれは前乃友梅意大綱云はより  
あり人君のいかにしはふより事なり

秘 後号の河梅意大綱云とれは前乃友梅意大綱云はより  
あり人君のいかにしはふより事なり

秘 此の河梅意大綱云とれは前乃友梅意大綱云はより  
あり人君のいかにしはふより事なり

秘 此の河梅意大綱云とれは前乃友梅意大綱云はより  
あり人君のいかにしはふより事なり

秘 此の河梅意大綱云とれは前乃友梅意大綱云はより  
あり人君のいかにしはふより事なり







白文れをけくし終りし人なり紅梅之用之小をひくは  
所らし小がし一人すうけさくし

女はこ白文れはくし終りし人なり紅梅れ方小終りし白文れ終り  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 秘師まき子されなり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 秘人志教よりなり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 世とれ人ひさし終りし人なり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 紅梅れ終りし人なり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 秘師君なり  
おんし終りし人なり

藤原京及の妹身より中君と云く

東の文入御りし 終りし文入御君なり 矣

幾度殿に言れ内東を介振して情れを又喜歌の意に  
父文乃かりせぬ 終りし文入御君なり

おんし終りし人なり 又文乃終りし人なり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 女君の言しひなり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 秘何し中宮なり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 文音れ終りし人なり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 終りし人なり  
おんし終りし人なり

おんし終りし人なり 終りし人なり  
おんし終りし人なり



中君とつらもつら 美のひとりのいへ 次子く

多邨のまのいへ 白文の 實

ひさの君とつらもつら 實 紅梅の二子 藤太大夫 實

白文の 實 白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初

白の初







うからせねがしん多ううり 秘 母とれ由るにをよ

お月とくお月 秘 徳文実母れはわが曲なりしと

と御姫君とらと 秘 子毒甚かしくれまこと

世中をろく内を 秘 我女まふ人にもなるもはる

とくしとく 秘 父王藤原及去る人まふしはあよ

月江がわとあ 秘 夕暮り嬌女れまふく赤くまふしはあよ

私大君れ長交奉り 秘 紅梅花の刺 後日

おれとた 秘 中君の 後

とくしとく 秘 山もまふしとく

とくしとく 秘 本さしとく

とくしとく 秘 羽此習を評してく

とくしとく 秘 我思ふとく

とくしとく 秘 浄心とく

とくしとく 秘 紅梅とく

とくしとく 秘 物乃とく

とくしとく 秘 珠勝乃とく

とくしとく 秘 及字及とく

とくしとく 秘 伯牙とく

とくしとく 秘 何半にとく

とくしとく 秘 とれとく

とくしとく 秘 取六条院とく

とくしとく 秘 危乃とく

とくしとく 秘 源中細云

とくしとく 秘 多那とく

とくしとく 秘 其時とく

とくしとく 秘 とあ

とくしとく 秘 非が

とくしとく 秘 ては

とくしとく 秘 け

とくしとく 秘 け

とくしとく 秘 け







日守君の事しんと、  
幾、お梅れ子系、おちまを枝柱上後こ  
こへおしと、  
お名義、  
直衣姿の

幾、直衣の何れを幾とていふらうと  
こころやうらうらうと  
不慮とれ、幸い、朱帯、此の時

徳角、此の時、是とていふらうと、  
此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、

此の時、此の時、此の時、此の時、  
此の時、此の時、此の時、此の時、



ふかえをゆつりながれりて  
吹くうきうきえき  
うきうきえき  
うきうきえき

皮笛鳴こあつりて  
天慶五年正月七日維其雨依無止例引青馬今日酒盃十一  
迎玉卿有酒氣吹皮留式部心敬定款王云年来更不有此  
之時今日似右時甚感悦多き  
原夏簡要云在季子記為

味之 早臈夏之皮笛猿樂記中古自吳朝笛ヲ渡セリ故皮  
豊衣上尤近將監大神武覺成皮笛之疑  
胡角一抄霜後夢 胡角ハ則皮笛也云 已上河海

私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき

私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき

私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき

私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき

私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき

私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき  
私うきえきをうきえき

大論云尺迦佛入温盤之後阿難登高座結集諸經之時其  
加佛仍無會疑佛再出給 秘我之 阿難八證四果之人也











いふれとるてもうさ  
みねのたのびのりー花こ

うららそとて  
いふれとるてもうさ

恨て後なしゆー

い初をり奇来入

うらら後入人思つては心いひくう社をさうま

いふい恨て後なしゆー

けいされ初をたのび心いひくう社の後之れはけいされ初

枝れゆふふとては

それめりてふれなひるえよさうれくもなしゆー

それふとふめなとてさうー

い初をり奇来入

い初をり奇来入

梅と評して定了紅髪を必白むれりゆー

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入

い初をり奇来入











色紙をぬいで えのめり葉の枝少くもれえのぬ回折く  
えのめりハえといふはもくれのめり

まゝにいついなるんと 紫紙梅乃ててくれとく

ひととら所を多よりあはく思こつれりやあはく

ふれりあをあつた屋にんえんゆのえりあはく

秘 せりあを界りついでに

花乃あをりいれりあはくもれえのぬ回折く

しんともり所を多よりあはく思こつれりやあはく

じいといふはもくれのめり

なれりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

少りあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く

口はりあをりいれりあはくもれえのぬ回折く



心小主人くも 白文の中書と事と人れんりては

何事にもまじり白文れりといひおろし

文の御ニカク 紅毒の糸乃御玉れ御事也

<sup>秘</sup> 文乃君なる事也

<sup>秘</sup> 年終に物にりしむかどわたり

こしひいふ御さく 初は文れ君を又まきし御事

何にたりてる人主なりてお梅の長れ由女乃こくを申す

と終つたまねといひ白文を何よりたはれ玉よはしと終つ

文を御もといれり ちさいふふらうふらなる

<sup>秘</sup> 耳よりお梅の縁を何事なる事と云ふ

白文をどうもにあといふるしと云ふ事と云ふ

<sup>日</sup> 祥の字んは神と白文をちさいふるしと云ふ事と云ふ

大納言君もあつていつてあつた日終る白文を

御女とていふ事と云ふ 御日一

何にりしと云ふ事と云ふ 初は文れ君を又まきし御事

かきれ下と事 初は文れ君を又まきし御事

まけし御事と云ふ 白文乃知也

何り八人申さる御事 初は文れ君を又まきし御事

おいされと云ふ 白文れ事とあつて

八宮乃御事 何字八文 相違事才八宮 多分は文りし

字派乃文れ御事 終角を之御事 何字中書と

<sup>秘</sup> 字派乃文れ御事 終角を之御事 何字中書と

事と云ふ御事と云ふ 御事と云ふ御事と云ふ

つたに推中書にあり 御事と云ふ御事と云ふ

<sup>秘</sup> 何に推中書にあり 御事と云ふ御事と云ふ

字派乃文れ御事 終角を之御事 何字中書と

終る御事と云ふ 御事と云ふ御事と云ふ

まけし御事と云ふ 御事と云ふ御事と云ふ

そのこと御事と云ふ 御事と云ふ御事と云ふ

まかえりし御事 御事と云ふ御事と云ふ







